

FAQ

Q1

小学校におけるキャリア教育に期待されるものとは何ですか？

A1

小学校段階は、社会人として必要な自律性や社会性を育て、一人一人の子どもたちがそれぞれの進路を探索・選択する力を培う上で、重要な基盤を形成する大切な時期です。

学級・学校・家庭・地域社会等における様々な活動を通して、将来設計の基盤となる「夢や希望」をはぐくみ、目標の達成を目指して工夫し努力することの大切さを体得させ、自信や有用感を高める機会を計画的に設けていくことが大切です。

特に小学校では、豊かなキャリア教育の実践によって、家族や友達、身近な地域の人々への関心や信頼感を高め、多角的な視野から他者を理解するための基礎となる力を養い、人々が自らの責任を果たしつつ相互に支え合って様々な集団や社会を築いている事実気付かせる必要があります。そして、子どもたち一人一人がそのような集団としての学校や家庭、ひいては社会の重要な一員であることを、実感を伴って理解できるようにすることが重要です。

また、実践に当たっては、児童の発達の段階に応じた指導が求められます。小学校段階におけるキャリア発達の特徴や、それらを踏まえた実践の基本的な考え方については、本手引き p.77～p.80 を参照して下さい。

Q2

中学校や高等学校でのキャリア教育は必要だと思いますが、小学校段階では早すぎるのではないですか？

A2

小学校におけるキャリア教育をめぐっては、「児童に具体的な将来設計を立てさせることが課題である」と誤解していらっしゃる方も少なくないようです。本手引き p.18～p.19 で整理したとおり、小学校段階は「進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期」であり、進路の選択自体は中学校以降の課題です。小学校におけるキャリア教育は、将来就きたい職業などの決定を迫り、そのための準備をさせるものではないのです。

低学年では、自分の好きなこと・得意なこと・できることを増やし、様々な活動への興味・関心を高めながら意欲と自信を持って活動できるようにすることが重要ですし、中学年では、友達のよさを認め、協力して活動する中で、自分の持ち味や役割を自覚することができるようにすることが大切です。また、高学年では、苦手なことや初めて経験することにも失敗を恐れず取り組み、そのことが集団の中で役立つ喜びや自分への自信につながるようにすることが求められます。

義務教育修了までに、すべての子どもに、自立して社会で生きていくための基礎を育てることが求められる今日、小学生の心身の発達に応じたキャリア教育は必要であり、決して「早すぎる」ものではありません。

Q3

「キャリア教育は新しい教育活動ではない」と言われますが、これは「これまでどおりの教育でよい」ということですか？

A3

文部科学省による『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引』（平成18年）には、「キャリア教育は、必ずしも新しい教育内容を導入しようとするものではない」と記されていますが、それに続けて、次のように指摘されていることを見落としてはなりません。

（キャリア教育は）教育活動の領域・単元の1つではなく、教育活動全体に働きかけていくという見方が大切です。小学校では、既存の教育活動のなかにキャリア教育と関連する内容が数多くあります。それらをキャリア教育の視点でとらえ直すことで、それぞれの活動の関連が明確になります。学級担任がすべての教科を見渡しやすいという小学校の利点を生かし、キャリア教育の視点を意識して取り組むことが大切です。

もちろん、学校や地域の特性、子どもたちの実情に応じて、新しい教育内容や活動を加え、キャリア教育をより豊かにする工夫もまた大切であることは言うまでもありません。けれども、まずは既存の教育活動をとらえ直し、その力を十分に生かすことが必要でしょう。

Q4

キャリア教育はどの時間に実践すればよいのですか？
また、教科の時間に行うと、いわゆる「学力低下」を引き起こすことにつながりませんか？

A4

小学校では、各教科や道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動において、子どもたちのキャリア発達を促す内容が多くあります。それらの機会を計画的に活用していきましょう。また、それぞれの教育活動の中に組み入れられてきたキャリア教育の言わば「断片」を振り返り、紡ぎ、つなげ、子どもたちの認識や視野を広げていく働きかけを、道徳の時間や学級活動、総合的な学習の時間などにおいて行っていくことが大切です。本手引きの第3章第2節や、第4章には数多くの事例を掲載してありますので、是非参照して下さい。

子どもたちが将来に不安を感じたり、学校での学習に自分の将来との関係で意義が見いだせず、学習意欲が低下し、学習習慣が確立しないといった問題が指摘される今日、キャリア教育を通して学ぶ意義を認識させる必要性はますます高まっています。教科の時間においても、それぞれの単元などの特質を生かしたキャリア教育を実践することにより、確かな学力を向上させることができます。なぜ勉強しなくてはいけないのか、今の学習が将来どのように役立つのかということなどについての発見や自覚が、日頃の学習に対する姿勢の改善につながり、そのことがさらなる新たな発見やより深い自覚に結びついていくのです。

Q5

キャリア教育の全体計画や年間指導計画はどうつくったらよいですか？

A5

キャリア教育を系統的・組織的に推進していくためには、その全体計画が欠かせません。全体計画を作成することにより、学校の特色や重点、それに基づいた教育課程におけるキャリア教育の位置付けが明確となり、学校全体で共有することができるようになります。また、全体計画を各学年において具現化する年間指導計画の作成も、系統的なキャリア教育の取組を進める上で極めて重要であることは言うまでもありません。

これらの計画の具体的な作成方法については、本手引き第2章第2節・第3節に詳しく示してあります。是非参照して下さい。

これらの計画立案の上でのスタートとなり、また、その改善を図るための評価のよりどころともなるのは、各学校で定めるキャリア教育の目標です。キャリア教育を通してどのような能力や態度を身に付けさせようとしているのかを具体的に定め、教員全員がそれを共有することが求められます。目標の設定に当たっては、児童の実態・家庭や地域からの期待などを踏まえ、学校の実情に見合ったものとするのが極めて重要です。詳しくは本手引き p.40～p.45 を御覧下さい。

Q6

キャリア教育の校内研修はどう進めたらよいですか？

A6

まずはキャリア教育について、正しく理解することから始めましょう。本手引きや、国立教育政策研究所が平成21年3月に発行したパンフレット「自分に気付き、未来を築くキャリア教育」(p.185「参考資料」を参照)を是非活用して下さい。例えば、年度初めの4月に職員会議等の機会にパンフレットを資料として使いながらキャリア教育に関する基礎的知識を確認し、その後、学年会等において本手引きを活用しつつ指導の具体的な見通しを立てたりすることが考えられます。その際、それぞれの学校におけるキャリア教育の全体計画や年間指導計画を確認しながら、研修を進めることが必要でしょう。

また、研修担当とキャリア教育担当との連携により、長期休業期間中に具体的な課題に即した校内研修を計画することも有効な方策です。

Q7

キャリア教育に対する家庭や地域の理解や協力を得るためにはどうしたらよいですか？

A7

キャリア教育を推進する上で、学校と家庭や地域との連携は不可欠です。

家庭に対しては、保護者会やPTA 便りなどを通して、各学校のキャリア教育の目標や基本的な考え方を紹介し、どのように取り組んでいるのか、取り組もうとしているのかについて丁寧に説明しましょう。特に、商店街見学・工場見学・社会人（ゲストティーチャー）による講話等の前後は、大人になることの意味や、働くことの厳しさや楽しさなどについて家族で語り合う絶好の機会となります。家庭での会話のきっかけとなるような資料を作成し、各家庭に配布することも効果的でしょう。

また、地域社会に対しては、学校便りなどでキャリア教育の取組を取り上げて広く配布することや、学校の公式ホームページを活用した情報発信も考えられます。地域社会の方々に、社会人講話・職業人インタビュー等をお願いする際には、地元企業からの信頼が厚い商工会や商工会議所に協力を求めることも有効な方策の一つです。

家庭や地域を含めた協力・連携の在り方については、本手引き第2章第4節に詳しく示してありますので参照して下さい。

Q8

キャリア教育の評価はどうすればよいですか？

A8

キャリア教育についての学習評価を行うに当たっては、児童の学習状況を把握し、それを教育活動や各学校の指導計画の改善につなげていくことが重要です。

児童の学習状況の評価については、まず教師が一人一人の育ちをしっかりと見取っていくことが大切です。ポートフォリオやアンケート、評価カード等を工夫しながら、一人一人のよさや変容を把握し、その結果はできるだけ子どもに返していきたいものです。また、子どもが自分自身を振り返ることによって子ども自らの成長を実感できるようにすることも大切です。

学習評価を教育活動や指導計画の改善につなげるために、このような子どもの成長を促した要因は何か、あるいは、成長に結び付かなかった理由は何かに焦点を当てながら実践を振り返り、キャリア教育の取組をPDCAサイクルの中で改善していくことが必要です。また、教育活動や指導計画を点検し評価することは、学校評価における自己評価及び学校関係者評価の一環としても重要であると言えるでしょう。

キャリア教育の評価については、本手引き第2章第5節を併せて参照して下さい。